
ふたりのゆう 零・ZA・音編

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりのゆう 零・ZA・音編

〔二二〕

N
0
0
2
6
B

【作者名】

零 · ZA · 音

【めぐら】

妙なテンションの女の子に、いきなり手を握られて捕まってしまった。ついでに、肉まんを与えて様子をみよう。

（前書き）

これは、「グループ小説」の第七弾です。同じ設定と登場人物で書いてますので、他の先生方の作品もよろしくお願いします。

また会えたら、その時は

そう思つていたあの頃が懐かしい。だけど、俺は今でもここに来てしまつ……。

ここだ、出合つた不思議な奴とのおかしくて樂しくて……そして、少しだけ心が痛かつた出来事。

それは、鮮明に思い出せる昨日の事のよつた出来事

「で……お前、誰？」

吐く息は白く流れ、吹いてくる風は冷たく俺の頬を撫でて通り過ぎてゆく。

今は寒いとかそんな事を言つてゐる場合ではなく、この状況を理解するのがやつとだ。

「だから、私は悠菜だつて言つてるでしょ。……頭、イつてる?」

「イつてるのは、お前の頭の方だ」

なんだか無性にムカつく顔をして、こいつを殴り飛ばしたくなる。

しかし、ここには駅前の広場にある噴水の前。

人通りが多すぎる。そんな事すれば、赤いランプを乗せた白黒ツートンの車がお迎えに来てしまつ。

ちらりと横を見ると、片手に肉まんを持ち上機嫌でおいしそうにかぶりついてる女の子が一人。

口を開かなければ、とても可愛いと思つが開けば最悪だ。年の頃は、俺より二つぐらい下だつ。

十四・五といったところか、まだあどけなさが残る子供っぽい顔つきをしてくる。

「おいひこよ、食べる?」

「いらん…お前が喰え」

「むう…なんか冷たい。でも、肉まんはあつあつう」

ムスツとした顔で、また肉まんを頬張り始めた。そんなに頬張ると窒息するぞと思うが、お構いなしに押し込んでいく。

大体、俺にこんな危ない知り合いや、友達はない。いや、友達が全然いない訳ではないぞ?

こんな危ない奴が友達にいないだけだ。そして、こいつは俺の友達でも顔見知りでも知り合いでも

隣人でも、クラスメイトでもその他大勢でも何でもない。

「何をつ、失礼なあ!こんな可愛い女の子を後ろから捕まえて……この犯罪者めつ」

「だから、それが頭がイつてるつて言つてんだよつ!」

「嫌がる私を無理やり押し倒して…あんな事やこんな事をする前に、栄養剤を飲んで…」

「押し倒してねえし、飲んでねえよつ!」

顔を赤くして俺を上目遣いに見るんじやないよつ!そのぶつ飛んだ思考回路をどうにかしろつて。

話がまつたくさつきから進んでないだろつがつ。

「まあ、いいじやん。ここで遭つたが百年目…地獄の底までお付き命いしますわあ、お兄様」

「して欲しくないつ!つて言つか、まだ行きたくないつ」

「え…生きたくない?」

「違うつ、行きたくないだあ!…どんな耳してんだよ」

「いいつ、絶対天然で馬鹿だ。素で馬鹿だ…こんな馬鹿見た事ないぞ。

「こんな耳…可愛い?」

「見せんでいいわつ!」

「ノリいいなあ、兄ちゃん。合格やあ

「やかましいわつ!お前はどこぞの審査委員かつ」

色白のうなじが見えてちょっと得した気分。少し、福耳つぽいかな

? これなら幸せが…って、馬鹿つ、俺の馬鹿つ！

トコトコ人を小馬鹿にしやがつてつ！なんなんだよ、こいつは本当にもつ…。

「つたく…。それより、手…離してくれ。いい加減、痺れてきたし疲れてきた」

「それが無理やねん。離れたくてもお~離れられない、さだめえなのさあ」

「やかましいわあ、歌うなつ」

「痛い…ツツコミは、もつ少し相手の事を考えて、ソフトに流れるようにな…」

俺を睨みブツブツ言つているこいつ 悠菜は、俺の左手をしつかりと繋いで離そうとしなかった。

これではどう見ても、ラブラブカッフルではないかっ！しかも、こんな瞬間からイチャイチャと…。

バカッフル決定である。これをバカッフルと言わすして何と言ひつ？「ラブラブのバカッフル決定つ！イエイつ」

「自分でいうなあ！」

「いたたあ…そんなに引っ張つたら、生まれるやんつ」

「何がだつ！」

離そうとしても、本当に離れない。瞬間接着剤で着けたみたいに、ピッタリと着いている左手を

恨めしそうに眺めてため息一つ。なんだつて、こんな事になつてるんだよ。

こいつが現われたのは、つい数分前の話だ。それで、これだけ馴染んでいる俺達もすごいと思うが…。

いきなり俺の前に現われて、「私と遊ぼうよお、お兄さん」って頭の痛い事を言い出し、今度は俺の手を取り

「私を好きにしていいからつ」と自分の胸に手を持つていこいつする始末。あまりの事に呆気に取られて

危なく間違いを犯しそうになつた。決して、アッチ方面の話ではなく、手が後ろに廻る事をしそうになつた訳ですよ。

そんなこんなで、とりあえず落ち着かせよ!と近くのコンビニでHサを与えて、今に至る訳だ。

「つて、兄ちゃん。私達、人気者やんつ」

「なんで、そんな妖しい方言使つてんだよつ」

「いいから、見てみい」

「何が つて、うおつ！」

いつの間にやら、俺達の周りにはもの凄い人だかりが出来ていて、拍手喝采。何故かアンコールの声も聞こえる。つて、俺達は漫才をしている訳ではないし…。誰だよ、俺の前に空き缶置いてる奴はつ！しかも、結構入つてるし…。すごい、万札が見るぞ…。

「大もうけだね。にいちゃん」

「アホかつ、んな呑気な事、言つてんじやねえよつ」

なんで、こんな駅前で、路上ライブをやりねばならんのだつ！

「逃げるぞつ」

「え、ああ、ちょっと待つてよお。わあたしいの肉まんがあ～！」

「うつさいつ、また買つてやるから黙つてろつ」

「ほんとだよ？約束だよ？嘘ついたら、プルトーウム飲ますからね、100リットルつ！」

「怖えよつ」

騒ぎ続ける悠菜を抱えるようにして、俺は走り続けた。こんなところにいたら、明日には色んな意味で有名人だ。いや、すでに有名人かも知れない。でも、そんな事より今はここを逃げるんだつ！

だつて、恥ずかしいだろ

「はあはあ……」今までくれば

「つうふう……つっぷ……気持ち悪い。肉まん様が、私を呼んでいる

…

「うひせよ……はあ。まったく、なんでこんな田にあってるんだよ」

息をするにもきつい。駅前から、かなり離れたこの公園までほぼ全力疾走だったのだ。

さすがにこの冬空を走るのは、喉がヒリヒリするし肺が痛い。さらには、空き腹に走ると辛い。

近くにあつたベンチに座り隣を見ると、もつ平氣をつに辺りを見渡している悠菜の顔があつた。

無性に腹が立つのはなんでだ？それは、全部ここに一つのせいだからだつ！

「それで…結局、お前は何者なんだよ？」

「私？私は

幽靈だよ」

「は？…ぬうれい？」

「オオイエスつ、そうです。幽靈です、浮遊靈です。そして、いつもは飛んでます」

妙なテンションの悠菜は、俺の周りを飛び回つて

飛び回つて

「うおっ！…ほんとに飛んでるよ」

俺の左腕を軸にクルクルと廻つている悠菜は、楽しそうにほしゃいでいる。

「だつて、浮遊靈だもん。飛んでなんぼの人生よん」

「いや、死んでるんだろ？お前…」

「じゃあ、靈生？れいせい幽靈だから、幽生？なんだろお」

ズレてる頭をフル稼働している悠菜が、俺を見て笑つていた。それを見て俺も何故だか知らないが

笑いが止まらなくなってしまった。こんなハイテンションな幽霊なんているのかよ。

「と言'うか、なんで見えてるんだ…？俺、靈感なんてないぞ？」

「私にも分からぬけど、誰でも見えるらし'いよ。とつてもす」」

「幽霊つて事でオッケー？」

「変わつた幽霊だな…」

それに、どうやら俺以外にもばつちり見えてるみたいだし、それなら全然怖くないぞ？

「それより、なんで死んだのとか…聞かないの？」

「聞いて欲しいのかよ。普通は、黙つているもんだろ…」

「別に私は、気にしないもんつ。だつて、死んだものはじょうがないじやんつ」

「どれだけ、ポジティブなんだよ…」

目の前で、ごく普通に話しているがかなりベリーな内容だぞ？俺はあえて聞かない事を選んだのに

自分から言つのかよ。本当に変わつた奴だよ、」」」

「えつとねえ。私ね、子供の頃から病氣で……去年ポツクリ逝つちやつたんだよ」

「え、あ……そつか…」

「それだけなの？随分と冷たい反応だねえ。もう少し、『苦しかった？』とか『痛かった？』とかないの？」

「あのな…」

本当に面白くなさそうに話すこいつは、頭がおかしいと思うけど。どこの世界に、病氣で死んだ人間にそんな事を聞く奴がいるんだよ。もしいたら、俺はこいつの事を疑うぞ？

「だつて…死んじやつたものは しょうがない…。生き返る訳じゃないしねえ」

俺だつて、そこまで馬鹿じゃないし、今の話を聞いて少し胸が痛いんだ…。こいつは、こんなに楽しそうだが

本当は、まだ生きていたかつたんじやないか？未練がない訳じゃないだろ？なのにそれを感じさせないのは悠菜の天性のものなのかもしないな…。

「まったく…ところで、なんで俺なんだ？」

「ん…何が？」

そこで首を傾げるな、馬鹿幽霊。いや、首傾げられてもこいつちが困る訳だ。

「つまり…お前が幽霊なら、俺に憑り付いた訳だろ？」

「ん？　　おお、そつかあ…そうだよね」

ポンっと手を叩き、納得顔の悠菜。なんだ？この展開は。

「まさか、お前…」

「何も考えてなかつた…てへつ」

「なんだとつ」

これまた、スペシャルな解答が返つて来たもんだ。これは予想外で、

「てへつ」はいらないんだよつ！

「だつて、暇そうに立つてゐんだもんつ。だつたら、遊んでもらえるかなつて思つて…」

「アホかつ、暇そつなら憑りつくのかつ！」

「むう…だつて、一人はつまらないし、面白くないし…」

途端にしおりしく俯いて、ブツブツと言に出した悠菜の顔は、なんだか寂しそうに見えた。

どうした事か…こいつもこんな顔が出来るのか。今までのハイテンションぶりが嘘のようだぞ。

なんとも、似合わないというか…こいつらしくないつ！

「まったく…とんでもない奴だな、お前は」

「お、おこつてる…？」

「別に…」

「あうつ、もひ…」

俯き加減に俺をチラチラと見てゐる悠菜の髪の毛を、クシャクシャと乱暴に撫でると

奇声を発して頬を膨らませていた。びつてんてんな悲しそうな顔を見るのは、嫌な気分だ。

それにどうにも調子が狂つ。呑つて聞もないが、そう思わせる何かがあるんだらうな、こいつには。

「えへへ…。といひでさあ」

「なんだよ？ 気色悪い笑い方して…」

「お兄ちゃん、名前何て言つの？」

俺を見ている田には、好奇心が宿つてゐる。子供が興味を持った事をなんでも聞いてくる、あの必殺技。

教えてオーラがバンバン出でるわ。

「教えない」

「なんでお、ケチつ！……あつ、分かつたあ。変な名前なんじよ？ ポポタマス三世とか」

「んな訳あるかつ」

「だつたら、教えてよお。ケチケチすると、ハゲるよ…しかも、右側限定で」

言つてゐる意味が分からんぞ、お前は。なんで、右側限定でハゲるんだよ。

それを、そんな真剣な顔を言つんじやないよ。一瞬、信じそつこなつただろうが…。

「ケチケチケチ…」

「悠一郎だ…」

「え…？」

「俺の名前は、悠一郎だつ」

無性に恥ずかしくてそつぽを向いてしまつた。なんで俺、こんなに恥ずかしがつてるんだ？

たかが、名前を言つただけでこんなに照れてびつするんだよ、まつた

く。

「悠一郎…？、やつか…私と回じ『ゆづ』がつくんだね」

「そうだな…」

「うわ…寂しい返事。もつ少し、凄いとか嬉しいとか、結婚してくれとかないの？」

「アホかっ、お前はっ！」

「あはははっ、やつぱり悠一郎は面白いねえ」
大笑いしているこいつは、ビーフしてこいつも元気なんだよ。幽靈だから、体力は底なしか？

それなら、俺にはついていけないぞ。いい加減、疲れてきた。

「うつせよ。しつかし、どうすりやいいんだよ…これは」

「さあ？どうにかしたら、離れるんじやない？」

「お前は知らないのかよ？一応、幽靈なんだろ」

「幽靈でも知らない事ぐらいあるさねっ」

「何、開き直つてんだよっ」

大威張りで言い切る馬鹿が一人。なんで、こんな奴に捕まっているんだよ…俺は。

「はあ…疲れた」

「私もあ…」

いや、俺はお前のせいで疲れんたんだっ！お前が疲れるなよっ。

「ところで、悠一郎はなんであそこにいたの？」

「ん…ああ、人と待ち合わせていたんだよ」

「そつなんだ…彼女？」

「ばつ、ち…違うつ！友達だ。それも男のな」

俺の前をウロチョロとする楽しそうな悠菜のうつとうつしい顔を手を押さえて退かすが、一向に引き下がる気配がない。

何気に白状してかなり寂しい気持ちになつているぞ？俺。

「妖しいなあ、本当かな…実は、やつぱり彼女とか」

「何が妖しいだよ。別に誰に会おうといいだろ」

「そりや、そただけどねえ。でも、聞きたいじゃん…私、恋つてしま事ないからさあ」

寂しそうに呟いて、俺を見ている悠菜の瞳は、コラコラと揺れていった。

恋がした事がない？ そうか、子供の頃から病気つて言つてたからな

「だから、恋つてどんなのか憧れがあつてね…」

今までの楽しさはどこへやら…。途端にへこみ、ベンチに座り込んでしまう。

だから、そんな悲しそうな顔をするな。俺はどうすればいいんだ？ お前のそんな顔を見て、なんて言えばいいんだよ。

「ねえ 悠一郎はどんな人が好き？」

「は？ 俺…？ って言うか、突然だな…」

「いいじゃんつ、悠一郎の好きなタイプを教えてよ。私は、悠一郎の事気に入つたよんつ」

俺を真つ直ぐ見つめる田には、一瞬の曇りも無く澄んでいる。そんな瞳で言われるともの凄く照れてしまつではないかつ！

こいつは、恥ずかしくないのか？ 俺は、今恥ずかしくて逃げ出したい気分だぞ。

「ねえねえ…教えてよお。悠一郎は、どんなのがタイプなの？」

「いや、それは…あの、そのだな…」

「もうつ、ハツキリしないなあ。ちやんと、ひとつ見てスパツと言つてよつ」

「うがつ うつ」

俺の首をこれでもかとこう力で強引にひねつている悠菜と、思いつきり田が合つてしまつ。

悠菜自身も驚いて目が見開いていたが、段々と頬が赤く染まつてくる。田と田と合つと恥ずかしそうに

微笑んでいるが、次第に田に熱が帯びて空氣な感じになつてきている。

「あ、あの…」

「うつ…な、なんだよ」

「ゆ、悠一郎の好み…私にならないかな…」

「あ…その、な…」

戸惑つたよつたな、それでいてビニカ懇願するよつた悠菜の声が聞こえていた。

考えるのも暫し、時間が掛かるこの状況。お互ひ動けないんだ。少しでも動けば、何かが壊れそうで…。

俺の視界には最早、悠菜の顔しか入つていない。それぐらい近い場所に顔があり、息が鼻を…頬をくすぐつていく。

「悠一郎…」

なんで目を閉じているんだ？悠菜。俺はどうしたらいいんだよ。まだ、会つたばかりだぞ？

それで、いきなりはまずいのではないか？俺はそつ思つわけですよ…ダメだ、頭が混乱している。

うまくこの場を乗り切る考えも思いつかない。

「あ、あの…だな

「私…悠一郎がいいの…悠一郎じゅ…なきゅ…イヤ」

ただ、それだけを言つとまた瞳を閉じる。これは、恋に憧れる女子特有のものではないか？

しかし、そこまで言われて、何もしないのは男の名折れと言つものだ。

だが、それは建前で実際のところは、悠菜の事は俺も嫌いではない。好きか嫌いかで聞かれれば、間違ひなく好きだ。

だけど、恋愛感情とは違う別なもの。本当にそれでてしまつていののか、分からないうが…。

「…んつ…」

軽くだが触れる感触は、身体中に電流を流していく。甘い…なんと甘いキス。

もつと、この甘さを味わつてみたい気持ちになるが、悠菜の体がビクンと動き現実に戻された。

「ふあ…」

「ビ、ビ、ビ、ビした…？」

トロソとした田をしげこる悠菜は、心うるさいとこりの顔をして俺を見ていた。

「えへへへつ…キス しけやつたあ」

「うう」

「くくくつ、嬉しいなあ。悠一郎とキスしけやつたよお…おやあ、おやあ、おやあ」

嬉しそうに頬を染めてこる悠菜は、両手で頬を押されてしまふ。いた。

あれ？ 両手…？ なんでおかしつて思つてるんだ、俺は。

「うおう」

「な、なこつ、どうしたの？」

「手 離れてる」

「あ…本当だ」

驚いて右手を眺めている悠菜と同時に、俺も左手を眺めている。

いつの間に離れたんだ？

あれだけ、頑固に引っ付いていたのに不思議なもんだよ。

「離れたかあ…一時はどうなる事かと思つたわ」

「そうだね…」

「どうした？ 嬉しくないのか…？」

俯いて下を向いたまま、囁くようにボソリと声に出す悠菜は、妙に元気がない。

小刻みに震えている肩。もしかして、泣いているのか？ しかし、なんで泣くんだよ…。

「私は…嬉しくないよ」

「何がだよ？ あのままだと、ビヘンよつもないだらうが…」「嫌なの…」

「おこ…」

大きな声を出したかと思えば、俺を見据えている瞳には大粒の涙が溢れそうになっていた。

「私……また、一人。ずっと一人……もう……嫌だよ」

「どうし

」

咄嗟の事に驚いて声が出なくなっていた。「どうしたんだ……」そう聞きたかったが、それが出来なかつた。

俺の体を包む温もりに、俺の感覚は麻痺していたのかも知れない……。

「悠一郎……私、もうと一緒にいたいよ。悠一郎と、もうと一緒にいたいよ」

俺の胸を濡らすのは、悠菜の涙。零れ落ちてくるのは、悠菜の気持ち。

ボロボロと泣きじゃくる悠菜は、俺を離すまいと必死に力を込めて、抱きしめようとしている。

指が服に食い込み、シワをつくるがそれは悠菜の溢れ出した気持ちを代弁しているんだ。

その気持ちに俺はどう答えたらしいんだ……。悠菜、俺はどうしたらいいんだよ。

「ふふふ……」

「な、なんだよ……」

「本気にして……？悠一郎

「なつ！」

俺を見上げている悠菜は、悪戯っ子のように笑っていた。だけど、どこか違う……今までとは、違う笑顔。

クスクスと笑う悠菜は、田尻の涙を拭いながら

「冗談だよ……もしかして、本気にして？悠一郎も意外と純情だねえ……うんうん」

そう言つて、おどけて舌を出していた。

「ふふふ…。おかしい顔をしてる」

「なんだとつ」

俺の顔を指差して大笑いしている悠菜は、お腹を抱えて転げまわり
そうな勢いだ。

「あはははつ

はは…ねえ、悠一郎

「今度はなんだよ…？」

「私、一人でも平気だから…」

クルリと後ろを向いて、俺からは顔が見えないけど、揺れている肩
は分かる。あれは、笑っている訳ではない。

「だから、ここでお別れだよ

」

かなりの意地つ張りだな、ここには。

あんな下手な演技までして、お別れしなくちゃいけないくらい、寂
しいんだろう？

「よかつたよ…一時は、離れなかつたら…つ…どひこ…よつかと思
つたよ」

「いいのか…？」

「うん、いいんだよ。やつぱり…悠一郎は優しいね…ほんとうに、
やさ…し…」

だけど、それを知つても俺には何一つ、してあげれる事はないんだ
。

「私が、幽霊だつて言つと…みんな、変な顔をして……どこかに、
行つてしまつ…」

「悠菜…」

「やつぱり…気持ち悪いんだよね。だから、私は一人がいいんだよ。
誰にも…迷惑、かけないから…」

それは俺に話していくと言つよつも、自分自身に言い聞かせている

と言つた方がいいのかも知れない。

それでもしないと、耐えられないのだろう。ぽんやりと俺は左手を眺めていた。

一番最初に繋がれた手は、一人は嫌だと思つ悠菜の心が無意識に、反応したんだろう。

だから、なにをやつても離れなかつた。そう思いたい。

「悠一郎は…私が幽霊でも……つうん、なんでも」

「お前は、お前だろ…悠菜」

「あり…がとう」

出来れば、声を上げて大声で泣いて欲しかつた。そうやって耐えら

れると俺の方が辛いんだよ。

「そつか…じや、俺は帰るな」

「うん…。それ、じや…ね」

「ああ　　なあ、悠菜」

「なに…？」

素つ氣無く俺に返事をする悠菜。だけど話し掛けても決して、俺の方を振り向こうとはしない。

多分、今振り向いたら負けなんだろ…。指をギュッと握りしめて

いるのが、それを表している。

少しの間だつたけど、楽しかつたぞ。俺は、忘れない…だから、お前も

「もし、また会えたら…その時は、また遊ぼう…な

「　　つ！」

声にならない声。それが漏れ聞こえていた。俺は酷い奴だ…悠菜を苦しめている。

あれだけの決心をしている悠菜に、酷い事を言つてるのは分かつてゐる。だけど、このままじや寂しすぎるだろう。

いつ、会えるかなんて分からぬいけど、もう一度悠菜に会えたのな

ら、その時は

ゆっくりと、それだけを言つと俺はその場を後にした。気付けば、頬に幾筋もつたつていくものがあった。

遠ざかって行くにつれて、次第に聞こえ始めた鳴咽。

「ひくつ…………ゆづこ…………ろ……」

泣き声と俺の名前を呼ぶ声がいつまでも、俺の耳に残つていた…。

あれから、一年

俺は、あいつとは会つてない。もしかしたら、もづこの世にはいな
いのかも知れない。

成仏していたらちょっと寂しいが、あいつも幸せになる事が、でき
るだろう。そうなつて欲しい。

でもなんとなくだが、あれで結構寂しがり屋だと想つから、未だに
この世に彷徨つているのかもと思つてしまつ。

「あひ……ここにいてもしょうがないか。どこ行こうかねえ……」

その場で踵を返して歩き出した俺の手を、不意に包み込む暖かな温
もり。

優しく、それでいてしっかりと繋いで、もう離さないとばかりに力

を込めて握つてくる強さと
少し控えめな、懐かしい声が聞こえてきた。

「また 私と遊んでくれますか……」

しつかりと繋がれた左手に、あの時の懐かしい感覚が戻つてきてい
た。

(後書き)

読んできたいいただきありがとうございます。

次は、戻つて第六弾を書かなければ…。しかし、ホラーは苦手です

(汗)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0026b/>

ふたりのゆう 零・ZA・音編

2010年10月28日07時23分発行